

肥満細胞腫（犬）

- ▶ 柴犬、11歳、♀
- ▶ 主訴：活性化リンパ球療法を受けるために他院より転院
- ▶ 症状：食欲、元気に問題ない

右前腕部の腫脹がみられた際には内部の血様物を10ml程度を月1回抜去している

- ▶ 既往歴、合併症：なし



初診時
(2016/4/2)



右前腕部の腫脹
(2016/4/20)



右前腕部の腫脹
(2016/9/5)



右前腕部の腫脹 (2017/2/5)



右前腕部の腫脹 (2017/4/17)

肥満細胞腫（犬）

▶ 治療経過

- ・2016/2：他院にて腫瘍一部摘出

- ・2016/4/16～2017/1/7にかけて、計13回CAT投与

4/16 4/30 5/17 5/31 6/14 6/28 7/16 8/6 8/27 9/17 10/26 11/30 1/7

- ・併用治療：オゾン注腸法（ほぼ毎日）

分子標的薬(イマチニブ)10mg/kg 9/9～10/28（毎日）

分子標的薬(トセラニブ)2.20mg/kg 10/29～12/23（2日に1回）

分子標的薬(マシチニブ)12.5mg/kg 1/7～2/13（毎日）

インタードッグ 4/9～9/4（週1回）計38回

インターキャット 7/26～9/6（週1回）計6回

ステロイド内服 1mg/kg 9/13～4/20（毎日）

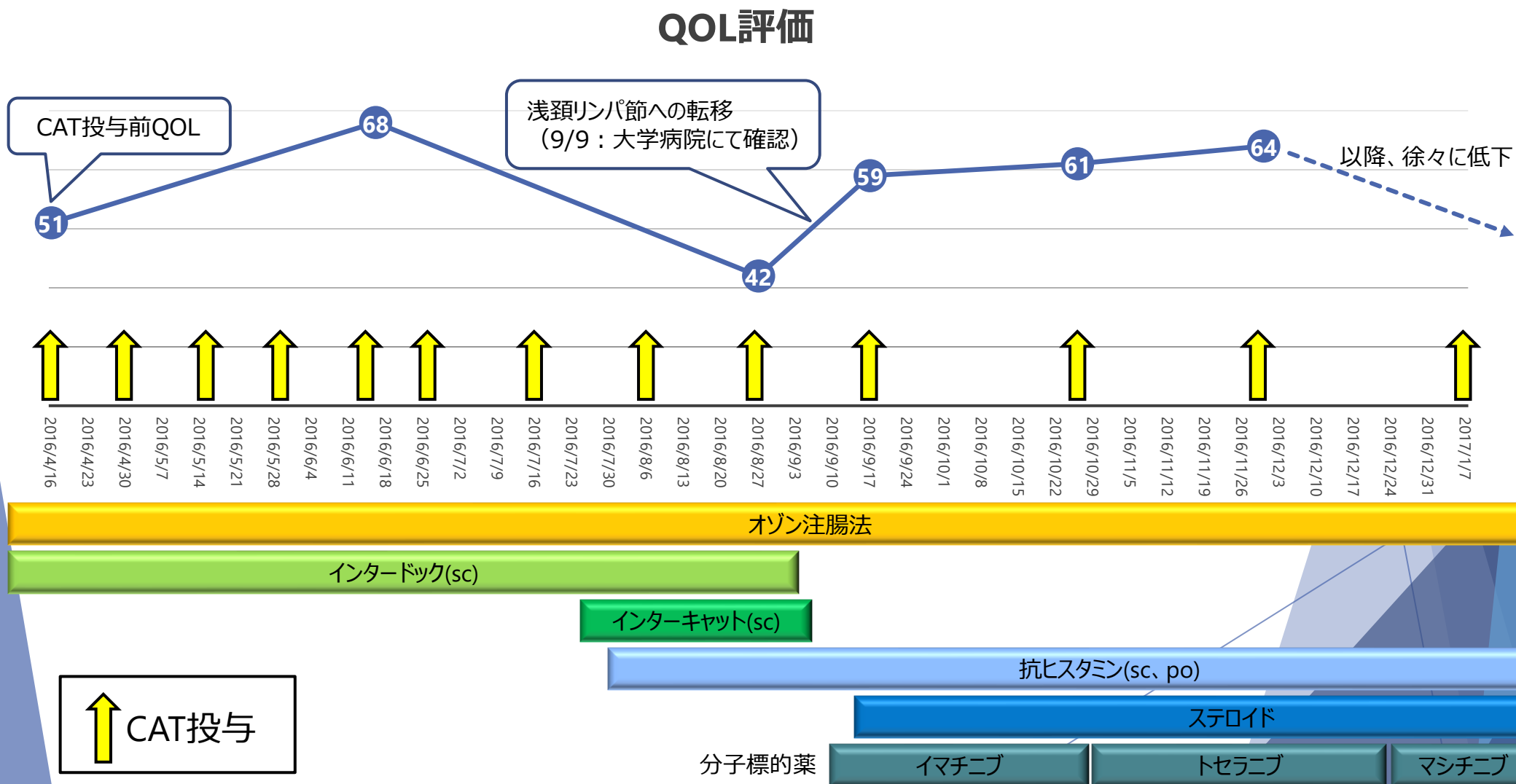
抗ヒスタミン内服 0.2mg/kg 7/30～4/20（毎日）

- ・13回目のCAT投与終了後は対症療法

- ・2017/4/20：死亡

肥満細胞腫（犬）

▶ QOL評価



肥満細胞腫（犬）

▶ 獣医師コメント

- ・CAT療法、オゾン注腸法によってQOLの上昇が認められ、元気に過ごせる期間が長かった
- ・一方で、CAT療法に肥満細胞腫の増大を防ぐ効果はみられなかったため、治療の後半では分子標的薬の投与も行った⇒初期はがんの縮小がみられたが、数カ月後には再び患部の増大がみられた
- ・CAT療法との併用により分子標的薬(イマチニブ)の副作用は抑えられていたが、その他の分子標的薬の副作用を抑えることはできなかった
- ・データが少なく確定的なことは言えないが、CAT投与と分子標的薬の併用治療により、期待された生存期間以上の生存がみられた
- ・飼い主さまは今回の治療にある程度の満足度を示していた